

四部ニカーヤ四阿含に現われたボサツ

杉 本 卓 洲

ボサツの理念の展開を歴史的に考察することは、インド佛教史上の興味ある重要な課題の一つであろう。そこでその最初の手続きとして、こゝでは資料をパーリ四部ニカーヤ漢譯四阿含に限つて、その間の消息をうかがいたい。

先ず四部ニカーヤに、次のような文章が散見される。

ピク達よ。私が正覺する以前、未正等覺者なるボサツであつた時に、次のように思つた。⁽¹⁾

こゝでは、未正等覺者という言葉が「ボサツ」の語の形容詞として用いられ、「ボサツ bodhisatta」とは正等覺者でないものであることを知る。このことは AN. I. 288 f. により明確に說かれている。すなわち、未正等覺者としてのボサツと、正等覺者との相違を述べ、その兩者の間に斷絶を置いている。

ピク達よ。私が正覺する以前、未正等覺者なるボサツであつた時に次のように思つた。世間において愛樂・患い・出離とは何であるか。樂と喜によつて生ずるもの、それが愛樂である。無常・苦・

變異の法、それが患いである。食欲を調伏し、食欲を斷つこと、これが出離である、と。ピク達よ。私が世間の愛樂を愛樂として、患いを患いとして、出離を出離として如實に了知しない間は、私は神々・沙門・バラモン・人々に對して、無上正等覺の正等覺者であると公言しなかつた。しかるに如實に了知してからは正等覺者であると公言したのである。

こゝでは、主體の連續的な同一性はあつても、ボサツはあくまで未正等覺者であつて、正等覺者とは相違するものとされている。⁽²⁾

しかるに一方 SN. II. 5 f., II. 104 f., MN. I. 21 f., I. 117, SN. V. 263 f., V. 281 f., AN. IV. 440 等におつては、未正等覺者としてのボサツから正等覺者になるまでに、十二因縁の順觀逆觀をなした⁽³⁾こと、四禪を成就し三明を具足した⁽³⁾こと等が述べられ、また MN. I. 163 には、煩惱なき無上安穩涅槃を求めて出家したことが述べられている場合がある。これらの記事によつて、ボサツとは正等覺者となることを志

向して、觀法や修行を深めてゆく者であることが知られる。そしてこゝでは、特に主體の連續的同一性ということが考慮されるべきであり、ボサツという言葉は、「菩提を求める有情」という意味で用いられていると言ふことが出来るであらう。

さて次に四部ニカーヤにおいて注目すべきものは、ボサツの誕生説話である。MN. III. 199 ff., DN. II. 12 ff. 等には、ボサツがトソツ天より母胎に降臨する時には世間に光明が現われ、大地が震動する。ボサツの母は安樂であり、マニ寶珠の如く輝いている。ボサツは生まれるや立つて七歩あゆみ、「私は世間の最上者である。これが最後生であり、最早や再生することはない。」と叫ぶ、と説かれてゐる。こゝでは、ボサツの誕生が極めて神話的奇蹟的に物語られ、未正等覺者としてのボサツではなくて、正等覺者(佛)となる必然性を既述のこととして内在しているもの、すなわち「菩提をすでに有した有情」という意味のボサツの誕生として物語られてゐると考えるべきであらう。そしてかゝる意味のボサツという言葉は、佛の超人化神格化と相俟つて發生したものと考えられ、更にバルフートの一彫刻、漢譯の相當箇所においては「世尊 Bhagavat」という語が用いられていることから推定するに、時代的にやゝおかれて用いられたとみるべきであらう。そして更には、DN. II. 12 ff. の記事はヴィパシ佛に關するものであり、右の如き意味のボサツの語が過去佛に適用されてい

ることに發展が認められる。

ところで四部ニカーヤに比して、漢譯阿含においては、増一阿含を除いて、ボサツの語が用いられることが極めて少ない。が、長阿含卷五・典尊經(大 1, 31b)の記事は看過してはならないであらう。即ちそこには、「如來往昔爲菩薩時在三所生處、聰明多智、諸賢當知過去久遠時。」とあつて、典尊と名く大臣が出家すると、多くの人々も彼にならつて出家した話が語られてゐる。そしてその終りに「時典尊大臣豈異人乎。莫造斯觀。今釋迦文佛即其身也。」と結ばれ釋尊の過去世物語とされてゐる。こゝではボサツの語が佛の前世にも適用されており、注目に價する。何故なら、四部ニカーヤ四阿含の中には多數の佛の前生物語があるが、かゝる例は極めて少ないからである。

次に増一阿含經を見るに、先ず四部ニカーヤに散見された「私が正覺する以前云々」という文に對應するものとして、「我曩昔未成_レ佛道_ヲ時、爲_ニ菩薩行_ニ恒作_ニ是念_一」(大 2, 665b)。「我本未成_レ佛道_ヲ爲_ニ菩薩行_ニ坐_ニ道樹_下一便生_ニ斯念_一」(大 2, 766, c. cf. 615b)。」という文が附加されてゐる。これはボサツの修道性が強調されてきたことを示すと考えられる。このことは、「我自憶_ニ昔日_ヲ未_レ成_ニ佛道_ヲ修_ニ菩薩行_一由_ニ一鶴_ニ故自投_ニ命根_一。何況_ニ今日_ヲ以_ニ成_ニ佛道_一。當_レ捨_ニ此_ニ比丘_ニ乎」(大 2, 766, c. cf. 615b)。」という文によつて、より明確に知る

ことが出来る。こゝでは佛は救済者としての性格を與えられ、有名な Sibi-jataka——鴿を助けるために、それを追つて來た鷹に Sibi 王が自分の肉を施した話——を豫想してゐると考えられるが、後世の衆生濟度の理念に結合するものとして注目すべきである。

また在俗者である一梵志が、ある女に妻としてくれるように願われた時に、「菩薩所行無愛惜。設與我作妻者必壞我心。」(大 2, 589 a) と答え、自分がボサツであることを暗示してゐる。更には、如來が一長者に向つて、「菩薩所施心恒平等。」(大 2, 792c, cf. 565a, 645a) と布施の時の心がまえを説いてゐるところがあり、ボサツやボサツ行が一般在俗者にも適用されてゐる。これは、四部ニカーヤにおいてボサツの語が佛世尊或は過去佛のみに用いられてゐたのと相違する點であり、注目すべきである。

その他、發菩薩心(大 2, 889 a)、諸菩薩(大 2, 565 c)、一生補處菩薩或は彌勒菩薩(大 2, 600a, 601b, 645a, 749c, 788b etc.) 等、他の經典に見られなかつた用例が認められる。

以上、四部ニカーヤ四阿含に現われたボサツの用例を簡單に見たが、各々佛典によつてボサツの語の用法、或はその意味内容が一律でなく、相違してゐることに注目すべきである。また雜阿含・中阿含においては、ボサツという言葉が殆ど用いられてゐないのに對して、增一阿含においては多數使用さ

れてゐる。また四部ニカーヤにおいては四部を通じて使用されてゐるといつた具合に聖典群による相違もみうけられる。そこでこれらの相違をいかに解釋するかが問題となる。これは各々佛典の原典批判の問題と絡んで難解な問題であるが、四部ニカーヤ四阿含を同時代成立とみるか、或は異時代成立と見るか、或は各佛典の所屬部派を考えるかによつて、それぞれ解釋が異なつて來るであらう。

何れにしても、右に見た如く、ボサツの語に對して種々異なつた用法が認められるが、それが同時代に發生したものと結論することは適當でない。それらの中には發展過程を認めなければならぬであらう。が、その史的發展過程を系統的にたどるには、なお多くの手續きを要し、安易な速斷を許さないであつて、なおたとえば各佛典の所屬部派——この問題自體一つの課題であるが——の見解をも參酌した上で考察されなければならぬ。したがつて、それは四部ニカーヤ四阿含以外の佛典の記載をも參酌検討されて始めて明らかにされると言えよう。

今はたゞいわゆる原始佛典なる四部ニカーヤ四阿含に現われたボサツの用例を見て、それがいかなる意味内容をもつて用いられてゐるかを検討したのであるが、ボサツなる理念の原始の様相の一端をほゞ把握しえたと言ふことが出来るであらう。

- 1 Pubbe va me bhikkhava sambodhā anabhisambuddhassa bodhisattass' eva sato etad ahoṣi. MN. I. 17, 92, 114, 163, 240, II. 93, 211, III. 157, AN. I. 240, 258, IV. 302, 439, SN. II. 5, 10, 104, III. 27, IV. 7, 8, 97, 233, V. 263, 281, 317 etc.
- 2 cf. MN. I. 19f., AN. IV. 302 f. etc. 大智度論卷四(大25, 91 c. 1. 5~6) 參照。
- 3 cf. MN. I. 240 ff., II 83 ff. etc.
- 4 本サハンの語彙に「干瀆」本生經類の思想史的研究 六四頁以下。石川「菩薩思想の源流」に「佛母」の「一四七頁。西「菩薩」の願 Prāṇihāna 行 carita に「佛母」の「一〇一」——「三頁。ERE. II. p. 739, Har Dayal, The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanskrit Literature, 1933, pp. 4~9 etc. 參照。
- 5 cf. A. Foucher, La vie du Bouddha, 1949. pp. 23~67, E. Windisch, Buddha's Geburt. 1908. ASGW. xxvi. 2. SS. 93~222, 宇井「阿含に現れたる佛陀觀」印哲研第四・一一三三頁以下。
- 6 これに關連して Bharhut Stūpa の一彫刻を注目すべきである。拙稿「シヤータカとボサツ」宗研一六七號五八頁以下。また中阿含(大1, 470 a) 又 MN. III. 129 ff. を比較すべきである。
- 7 AN. II. 130 ff. 參照。
- 8 干瀆・菩薩思想の起源と展開(佛敎の根本真理・二一九頁以下)參照。ペーリにはボサツの語があるが、漢譯ではない例。雜阿含(大2, 2 c, 53 a, 79 c, 80 b, 101 a) 中阿含(大1,

四部ニカーヤ四阿含に現れたボサツ(杉本)

- 536 c, 539 b, 589 a, 776 a) 單一阿含(大2, 744 a, 760 b, 773 c) 等。漢譯阿含に見る本サハンの用例を「雜阿含(大2, 166 c)」 中阿含(大1, 3 c, 16 a) 等があらわす。
- 9 干瀆「本生經類照合全表」七頁以下參照。
- 10 單一阿含(大2, 616 b, 766 c) 等。
- 11 宇井・前掲書一七七頁以下。徳岡「原始佛典における彼岸と佛陀」に「西山學報」三號「一六七頁以下參照。
- 12 Śibi-jātaka 及び S. Lévi, JA. 1908, p. 146, M. Winternitz, A History of Indian Literature II. p. 548, E. Lamotte, La Traité de la Grande Vertude Sagesse, p. 255. n 1. etc. 參照。
- 13 大智度論卷四(大25, 86 a, 1. 27~28) 參照。
- 14 DN. III. 76 及び Metteyya (=Maitreya) 各々佛に「及ばざるが」本サハンの「及ばざる」。
- 15 增一阿含經に「六波羅蜜(大2, 645 a) 三乘(大2, 554 c, 570 b, 626 a, 674 a, 757 a, 773 a, 788 c, 792 b) 大乘行(大2, 595 b) 小乘(大2, 640 a) 等の言葉、同序品——後世の附加と考えられる——には「菩薩數億不可計」「釋師出世壽極短肉體雖逝法身在」(大2, 549 c) 「如來法身不敗壞永存於世不斷絕」「菩薩發意趣大乘」(大2, 550 a) 等の記事があり、他と相違する。尙、四部ニカーヤ四阿含より古く成立したと言われ Sutta Nipāta に「一例のみはあるが、ボサツの語が現れている(G. 683, p. 132)」。そこには「ボサツは人々の利益安樂のために(hitasukhatāya) 人間世界に生まれたのである。」と「注目すべき理念が説かれてゐる」。